

源平盛衰記と太平記

方法としての説話

GEMPEIJŌSUIKI AND TAIHEIKI

Tales as a devise

松尾 葦江*

The close relation between *gunki-monogatari* (martial narratives) and *setsuwa* (tales) was pointed out long time ago. For instance, the theory of the *gunki-monogatari* is that they are composed of tales, and organized in the style of chronicles: many of the *gunki-monogatari* are based on various tales; people's creativity gives them a lively tone by means of tales. And these are certainly true of *Heikemonogatari*.

The great number of *Heikemonogatari* versions seem to imply the wide range of themes the people in the medieval age sought in *Heikemonogatari*, as well as its forms in the period of transition. I'd like to take up its most characteristic version, *Gempeijōsuiki*, and see how the tales function in them, to analyze its characteristics as a literature.

In *Gempeijōsuiki* tales are generally lengthened or added with other tales. As a result, in some cases, the story divert from the

*MATSUO Ashie 椋山女学園大学教授。東京大学大学院修了。著書に『平家物語研究』、論文に「歴史語りの系譜—保元物語・平治物語を中心として—」などがある。

context ; or the logic of the story is left to the readers with some choices owing to the numerous examples. We have long underrated these as a diversion of the plot. Yet in *Gempeijōsuiki* tales serve not only as materials but as a device to organize a story. It seems as if *Gempeijōsuiki* had tried to dissimilate and comment on the well-known *Heikemonogatari*, to construct its own world, just as similes and metaphors enliven sentences with unexpectedness and series of images.

In the history of *gunki-monogatari*, *Gempeijōsuiki* is said to occupy a position between *Heikemonogatari* and *Taiheiki*. I'd like to analyze the point, too, through the function tales.

I

<軍記物語と説話との関係>

軍記物語と説話との関係については、従来次の三つの問題が、主にとりあげられて来た。

①構成上の単位を成す。②素材として摂りこまれている。③物語の中でどんな機能を果たすか。

軍記物語の構成は、原則として説話（ある一まとまりの話柄）を単位とし、年代記的記述によって統括されている。説話や説話群を、時間の流れが串刺しにした形に喩えることができよう。従って軍記物語の構造を分析するには、説話の研究が重要になる。元来独立して伝承されて来た説話が、物語の中へ採り込まれ（そのために①のように一団を成している場合もあると考えられている）、物語にリアリティとヴァリエティを与え、軍記物語の成立過程を推定する手がかりになると考えられてもいる。現在まで残る説話の多くは必ずしもそうとは言えないが、説話が民衆の口承の世界をくぐり抜けて伝わって来たこと

に重きを置いて考えれば、無名の多数の人々、即ち民衆の想像力が説話を媒介として物語に活力を与えているとの見方もできる。昭和二十年以降の軍記物語研究の新風では、特にこの点が強調された。

<説話の分類>

説話を物語の構成単位としてでなく、機能を中心に見ようとすると、物語内の時間の流れを構成する本系的叙述と、物語内の“現在”からは外れている傍系的・挿話的叙述（従属説話）とを分けて考える必要がある。従属説話の主な機能は、およそ次の三種である。

a 先例説話………当面の事件や情況と似た（類例）、或いは反対の（反例）

説話を述べて、現在を論評したり未来を推測したりするもの。

b 由緒説話………事物の始まりや由来を述べるもの。社寺縁起や行事・器物

の沿革を説明する説話も含まれる。

c 人物説話………ある人物のエピソードや、略伝を逸話で綴るもの。その人

物に対する評価を示し、物語内への登場や死去の際に置かれることが多い。

本発表では、前掲の①～③の内、撰取と機能との間——即ち、文面に表示された説話の目的だけでなく、説話が物語の中で果たす役割を、創作や成立の問題に向けて考えてみたい。源平盛衰記（以下、盛衰記と略す）の説話は、その多くが書承と創作に依るもので、前述の「衆庶の想像力」に由るものではないと思われるが、しかし、盛衰記が説話を活用することを、自らの文学的方法として選んだという点に注目して、その所以を考察しようとするものである。

<平家物語諸本群と盛衰記>

平家物語は多様な諸本群を擁している。それらの諸本は、完成以前の諸段階を示すものではなく、中世人たちが「平家物語」に求めたものの幅の広さを示すものとして考えるべきである。中でも、盛衰記はそれら諸本のもつ一面を極度に推し進め、最も個性的な、ある意味では諸本群の一つの頂点を成す本である。殊に説話のあり方に特徴がある。

盛衰記は説話が長大化、積層化し、屢々物語の主筋が見失われる程である。

時には説話挿入の本来の目的から逸脱したり逆行したりする場合さえある。従来はこの点を構想の拡散化として否定的に評価して来た。しかし、単にそれだけだろうか。盛衰記はなぜこのような形になっているのか。

盛衰記には二重の題材があった——治承承寿の内乱と、それを作品化した『平家物語』との二つである。盛衰記は、既に知られている『平家物語』を異化し、解説することによって自らの作品世界をうち樹てているのである。そのような“成立”の場合、説話の大量の導入と機能の多様化は、盛衰記にとっては素材の問題ではなく、文学的方法の問題であったのだと思われる。

II

<解説による理解>

盛衰記の説話は、事態を解説・評論する箇所に現われることが多い（即ち、時間の流れを一括して記述する部分や、合戦記事の部分には少ないということでもある）。盛衰記は、解説や注釈によって初めて、事態の意味を理解し、一体化できる性向を有しているようである。盛衰記自らが、それを明らかにしているとも言える例が、巻39「重衡酒盛」末尾である（盛衰記本文の引用は、本稿では慶長古活字版によった）。

語り本であれば、重衡と千手前が、音楽を通じて交流する一夜の場面の叙述に全てを託す。しかし盛衰記は、立ち聞きした頼朝が、齋院次官親義に、朗詠の意味（ここで「四面楚歌」の故事説話が引かれる）や楽曲の選択の意味を問い、

佐殿モ、中将ノ琵琶ヲヒキ朗詠シ、千手が琴ヲ^{ひき}弾歌ヲ謡タリシヨリモ、親義一々ニ釈シ申タリケレバ哀ニ思給テ、同袖ヲ^{おなじく}絞給。

というのである。されば盛衰記には語り本系平家物語とは異なる文学的方法が必然となることが予想されよう。

説話が物語の主筋から逸脱するように見える部分であっても、主筋とは微妙な連関があり、いわば背景や情調を作り出している場合がある。例えば巻1

「五節夜闇打」に含まれる、長大な鴻門会説話は、これから始まる大がかりな史談の世界——権力争いの熾烈さを予想させるし、巻36「忠度名所々々ヲ見ル付難波浦賤夫婦」に含まれる、所謂蘆刈説話は、前後の物語部分の雰囲気と同調するものと考えられる。後者について見ると、一谷合戦の前夜、平家の人々は望郷の思いに駆られ、殊に維盛と、都に残るその妻は、恋慕の想いが募る。そこに挿入された名所尽しと、歌物語的な蘆刈説話は、王朝的・抒情的な雰囲気を醸し出すと共に、故あって別れねばならなかった夫婦の傷ましい思いを（論理的照応ではなく情緒的に）、濃く彩る役割を果たすのである。

勿論、あらゆる説話にこのようなはたらきがあるわけではなく、説話内容そのものへの興味（娯楽性）と啓蒙性が、このように大量で多様な説話を摂取した第一の理由だが、前述 a～b の三種の機能とは異ったレベルでのはたらきを与えて説話を振り込んだ編著者の意図を、我々が見逃している場合も、少ないのではないか。

<レトリックとしての説話>

盛衰記の説話の中には、先例説話であっても、主筋との関連づけがやや突飛な場合がある。一方、比喩表現にも、美文そのものが目的化し、語彙が限定された中から使用されている為に、文脈上突飛に感じられる例が見出される。凄惨な合戦場面になびく旗を、紅葉や梅桜に喩えたりする（巻37「平家開城戸口・源平合戦」）。比喩は意外性と類同性の組合せによって効果を発揮し、表現を豊かにする。盛衰記では説話もまた同様の効果を期待されていたのかも知れない。

歌枕や歌語が、伝統的に培われた、あるイメージを担って特別な機能をもつように、盛衰記では説話もまた、イメージや雰囲気の醸成に利用されている（その一例を、前述の蘆刈説話に見ておいた）。説話内容の個々の照応にこだわらず、あたかもレトリックの一部であるかのように用いられている。このような機能も、a～c の三分類からはみ出したものと言えよう。

<頼政話群の場合>

一例として、巻16の高倉宮挙兵事件の末尾にある頼政話群を考察しよう。こ

の話群はかなりの分量があり、一団を成している。高倉宮を担いで初めて反平氏の兵を挙げた源頼政の敗死の後に、頼政が文武に秀れていることを語る追悼話群としての機能が第一義であって、その点では巻四「頼政歌」（御輿振に冷静に対応した頼政を賞賛する）に共通する。主な内容は(1)「人しれぬ」歌により四位に昇任し、宮中の女房と連歌の応答をする、また「上るべき」歌により三位に昇任するという歌徳説話 (2)難題の隠題歌をみごとに作ってみせた話 (3)菖蒲前説話（鳥羽院の愛人菖蒲前に懸想した頼政に、鳥羽院が「頼政ガ眼精ヲ見バヤ」と三人の女性の中から本人を当てさせる、歌徳・恋愛説話 (4)宮中に現れた不思議な剣が霊剣であることを頼政が証明する宝剣説話 (5)鶴退治説話（鶴退治に使用した矢と弓についての由緒説話を含む）というものである。この(3)(4)(5)の説話に共通するのは、隠されたものを見出す能力を、弓矢の名人の能力として頼政に賦与していることである。「眼精」（見ぬく能力、また瞳の意）の語が、(3)と(5)の説話に見えていること、武士を芸能者として尊重する思潮に注目したい。(4)の霊剣発見譚では、平治の乱を起こした愚昧な藤原信頼と対照され、宝剣紛失を早くも予言している（但し、此の宝剣説話は、壇之浦で三種神器の中の宝剣が紛失した後に記される巻44の説話とは合致せず、別系統のものである）。この頼政話群には、ここだけに通用する、一貫したテーマがあるのである。しかし、頼政の目効きの能力は、巻15「相形」で言及される、^{ひとかど}一廉の人物は人間の運命を見ぬく能力があるものだという説話とは矛盾する筈だが、頼政に高倉宮を正しく評価できなかった責任を負わせる記述はない。つまり、この話群は、頼政の能力を「眼精」の点で評価し、宝剣の代替品が予め天から与えられていたことを語って、王権の安泰を予言する役割を持たされながら、物語の主筋との論理的脈絡は緩いものになっているのである。

似たような例が、巻19から22に亘る頼朝旗挙話群にも見られる。ここには頼朝に「王位継承者」のイメージを重ね、王法・仏法の両面からの支持を暗示する説話が鑲められている。

即ち、盛衰記の説話は、基本的に前述 a～c の三分類で説明されるような機

能をもつと同時に、それらからはみ出す、論理的には必ずしも物語の主筋とは一致しない、第二義の役割をも果たしているのである。

Ⅲ

<太平記の場合>

太平記と盛衰記は、その文芸的性格に共通点が多いと言われて来た。長大な説話が挿入される、落首の記事が多い、笑話性が強い、表現には対句や誇張が多い、予兆記事が多い、人間の欲心を描く、人物には狂的な行動が多く、事態は人物の意図通りには進まない、等々。軍記物語史の上で、平家物語と太平記の性格的断絶は大きく、その中間に盛衰記を置くことによって初めて、展開が説明できると考えられている。両者の成立の先後は厳密には判っておらず、思潮的にはほぼ同時代かと考えられる。しかし、両者の根本的な相違は、盛衰記が、既知の事件とそれを描いた作品との二重の題材をもち、それらを異化することによって自らの作品世界を構成したのに対し、太平記の方は、決着の未だついていない同時代史を、先行作品や故事説話や、思想の枠組を借りて叙述の可能な形に整理し捕捉しなければならなかったところにある。従って、両者の形態的な類似を、単にジャンル史の展開として直線的に位置づける前に、考察されねばならない幾つかの問題があるものと思われる。

例えば、内裏炎上と再建に伴う、弘法大師の説話を見てみたい。盛衰記巻4には、安元3（1177）年4月の京都の大火によって大極殿が焼失したことが記され、嵯峨天皇の代に空海が大極殿の額を書いた際に小野道風が嘲笑した説話がある。太平記巻12にも、建武元（1334）年正月、大内裏造営の議奏がなされた記事の中に同じ説話がある。太平記は、大内裏が度々の火災に遭った因由を中国の聖帝堯舜でさえも簡素を旨として宮殿を営んだのに対し、「イハンヤ粟散国ノ主トシテ、此大内ヲ造ラレタル事、其徳相応ズベカラズ」と言う。続いて次のように述べる（太平記本文の引用は、日本古典文学大系により、私に訓み下した）。

後王若無徳ニシテ居安カラシメント欲シ給ハズ、国ノ財力モコレニ依テ尽クベシト、高野大師コレヲ鑑ミ、門々ノ額ヲ書セ給ケルニ、大極殿ノ大ノ字ノ中ヲ引切テ、火ト云字ニ成シ、朱雀門ノ朱ノ字ヲ米ト云字ニゾ遊シケル。小野道風コレヲ見テ、「大極殿ハ火極殿、朱雀門ハ米雀門」トゾ難ジタリケル。大権ノ聖者未来ヲ鑑ミ書給ヘル事ヲ、凡俗トシテ難ジ申タリケル罰ニヤ、其後ヨリ道風筆ヲ執レバ、手戦テ文字正シカラザレドモ、草書ニ妙ヲ得タル人ナレバ、戦テ書ケルモ、臆テ筆勢ニゾ成ニケル。遂ニ大極殿ヨリ火出テ、諸司八省 悉 焼ニケリ。(大内裏造営事^付聖廟御事)

盛衰記があたかも道風の嘲笑が予言となって大極殿が焼失したかのように語る(「小野道風見之、大極殿ニハ非ズ、火極殿トゾ見エタル、火極トハ火ヲ極ト読リ、未来イカバ有ベカルラン、筆勢過タリトゾ笑ケル。去バニヤ、今カク亡ヌルコソ浅増ケレ」)のに対し、太平記は政治批判性が強くうち出されている。この説話に続いて、再建後間もなく、今度は菅原道真の怨霊のために、雷火で炎上したとして、北野天神縁起を延々と記す(巻12の約二分の一)。これが所謂太平記の脱線癖であるが、恐らくは、延喜聖代での最大の失錯と考えられていた道真配流説話によって、政治批判をさらに強調するつもりもあったのではないか。太平記は、説話そのものの面白さも撰取の目的の一つに数えていたであろうと思われるし、歴史語りとしては時間的にも空間的にも、規模を壮大にするはたらきもあったであろうが、自らの主張の支えとするために説話を利用していることが多い。単なる例証にとどまらず、不安定な事態への評価を多少強引にでも確定してしまう手段として、量感のある説話で圧倒する。

<説話的発想について>

盛衰記は全体的に、“説話文学”的な印象が強い。これは本系的叙述の部分についても言えることである。その溯源となる“説話的発想”をなるべく具体的に抽出してみるならば、暴露性、事実性、意味の賦与、などを挙げることができる。即ち、人間の欲望や常軌を逸した行動を、興味ありげに描くこと、異常な、不思議な事件を、むしろそれ故に、これは実際に在ったことなのだ、と

いう前提で描くこと。そして、事件を事件として書くだけでなく、そこに意味を賦与して行こうとすること、である。巻4「京中焼失」の成田兵衛為成とその同僚の発狂によって安元の大火は起こったとする記事などは、その一例である。このような発想法は、あたかも衆庶の想像力に由るかのように見える。恐らく盛衰記は、それを意図的に利用して、作品世界の真実性と娯楽性を保証しようとしたものと思われる。

太平記における究明は未だ今後の課題であるが、盛衰記と太平記の、龐大な説話——構想を挫折させ、叙述を拡散させるかのように評されてきた説話の採用は、じつはそれぞれの作品が選択した文学的方法の一つであったこと、我々は今までその点を十分に読みきれていなかったことを、問題提起したいと思う。

討議要旨

ワルシャワ大学のミコワイ・メラノヴィッチ氏より「ヨーロッパでは、日本で印刷されたテキストを大事にしている。が、そのテキストに間違いが多いとのことであるが、その間違いは、原本が誤っているのか、それとも読み間違いであろうか。またくげんぺいせいすいき>という読み慣れてしまっているが、くげんぺいじょうすいき>が正しいのか。更に軍記物に入った説話の流れについて」の質問があった。発表者は「昭和初期に作られた『源平盛衰記』の本文は読書人のためのものとして作られているので、校訂者が主観で読んでしまっている場合がある。現在の国文学では、元のままの形でしかも読めるテキストを作るよう心がけている。くげんぺいせいすいき>かくじょうすいき>かという点は、現存の写本に「しやうすい」とかなで書かれているものがあるので、私は一応それに従っている。また、『源平盛衰記』に取り入れられた説話は、机の上で創作された部分も多い。既に書承で伝わって来た資料から取り込んだ所もある。『盛衰記』は、人々の支持によって口から口へと伝えられて来たように見せかけてつくり上げられている。そこが『盛衰記』の方法だと思う。」と答えられた。